

- §13 柱・梁・壁・スラブ打増し部配筋要領
1. 構造図に記載のない打増しを行う場合は事前に監理者と協議すること。
 2. 柱、梁の打増し部に耐力壁が取り付く場合は打増し配筋要領は構造図による。
 3. 打増し寸法a、a1、a2が70mm未満の場合は補強筋不要とする。
打増し寸法a、a1、a2が70mm≦a≦200mmの場合の打増し部補強要領は図13-1-1～図13-3-2による。
 4. 打増し寸法a、a1、a2が200mmを超える場合の打増し部詳細事項は構造図による。
 5. 打増し部は打増しコンクリートを示す。
 6. ※部の打増し補強筋の定着長さについては、監理者に確認すること。

- 13-1 柱
1. 梁、耐力壁およびスラブの鉄筋の定着長さは、柱躯体内で確保し、打増し部は定着長さに算定しない。
 2. 柱の打増し部配筋要領は表13-1、図13-1-1、図13-1-2による。

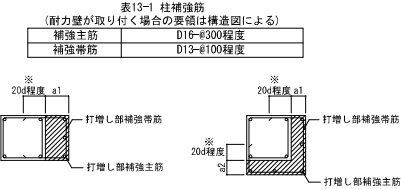


図13-1-1 柱の打増し要領

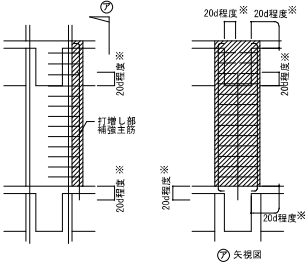
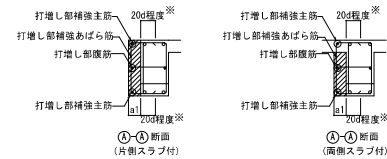


図13-1-2 柱打増し部の補強主筋の定着

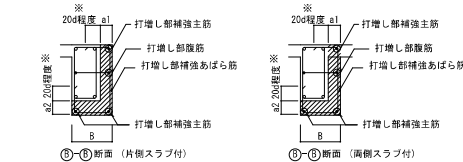
- 13-2 梁
1. 小梁、耐力壁およびスラブの鉄筋の定着長さは、梁躯体内で確保し、打増し部は定着長さに算定しない。
 2. 梁の打増し部配筋要領は表13-2-1、表13-2-2、図13-2-1による。
 3. 打増し部腹筋は梁と同径、同段数とする。

表13-2-1 梁側面補強筋 (耐力壁が取り付く場合の要領は構造図による)		表13-2-2 梁上下面補強筋 (耐力壁・スラブが取り付く場合の要領は構造図による)	
補強主筋	D16	梁幅	B≦350mm 350mm<B
補強あばら筋	梁あばら筋と同径、 間隔200mm以下	補強主筋	2-D16 D16-φ250以下
		補強あばら筋	梁あばら筋と同径、間隔200mm以下

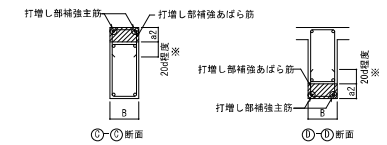
- (1) 梁側面を打増しする場合



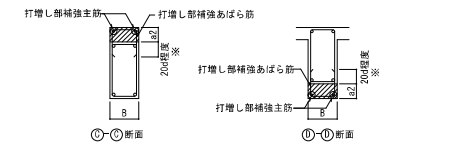
- (2) 梁側面および梁下面を打増しする場合



- (3) 梁上面を打増しする場合(スラブなし)



- (4) 梁下面を打増しする場合



・スラブが取付く場合は図10-3-2、図10-3-3を参照。

図13-2-1 梁の打増し要領

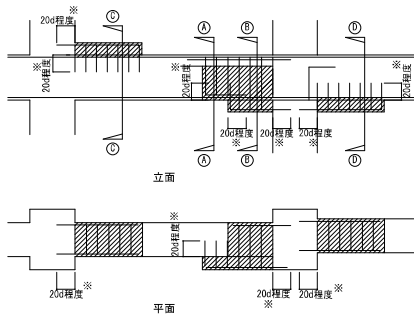


図13-2-2 梁打増し部の補強主筋の定着

13-3 壁・スラブ

1. 壁およびスラブの打増し部配筋要領は図13-3-1、図13-3-2による。

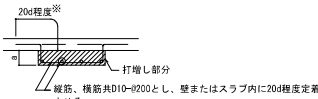


図13-3-1 壁の打増し要領

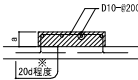


図13-3-2 スラブの打増し要領

工事名
図面名

除雪車格納庫(奥出雲工区)新築工事

配筋標準図(11)

編
尺

—

作成日
代表

令和6年11月

模
型

担
当

A・S・E・P・M

11

[illegible][illegible]

(1) すみ肉溶接		$t \leq 16$ <table> <tr> <td>t</td><td>6~7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>12</td><td>15</td><td>16</td></tr> <tr> <td>a</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>11</td></tr> </table> ● 母材片肉溶接の場合は $b = t$ とする。 ● 両側は $(1 + 0.5/b) \cdot m$ とする。		t	6~7	8	9	10	12	15	16	a	4	5	6	7	8	9	11								
t	6~7	8	9	10	12	15	16																				
a	4	5	6	7	8	9	11																				
		$t \leq 16$ <table> <tr> <td>t</td><td>19</td><td>22</td><td>25</td><td>28</td><td>32</td><td>36</td><td>40</td></tr> <tr> <td>a</td><td>8.5</td><td>8.8</td><td>9.5</td><td>9.8</td><td>9.8</td><td>10.5</td><td>12.0</td></tr> </table> ● t は t_1、t_2 の小なる方とする。 ● 両側厚さは $a = m$ とする。		t	19	22	25	28	32	36	40	a	8.5	8.8	9.5	9.8	9.8	10.5	12.0								
t	19	22	25	28	32	36	40																				
a	8.5	8.8	9.5	9.8	9.8	10.5	12.0																				
(2) 完全溶け込み溶接		$0.5 \leq t \leq 2$ (傾し 1:2) のとき 4mm とする。 <table> <tr> <td>t</td><td>6</td><td>8</td><td>10</td></tr> </table>		t	6	8	10																				
t	6	8	10																								
(裏はつり後溶接) 		溶接姿勢 $F \cdot H \cdot V$																									
		$0.5 \leq t \leq 2$ (傾し 1:2) のとき 4mm とする。 $S = 1/4$ <table> <tr> <th>溶接位置</th><th>0</th><th>1</th><th>2</th><th>溶接方法</th><th>溶接姿勢</th></tr> <tr> <td>6.5.1</td><td>3.5</td><td>9</td><td>9</td><td>GC</td><td>F・H・V</td></tr> <tr> <td>6.5.2</td><td>3.5</td><td>7</td><td>9</td><td>GC</td><td>F・H・V</td></tr> <tr> <td>6.5.3</td><td>3.0</td><td>7</td><td>9</td><td>GC</td><td>F・H</td></tr> </table> ● 傾強すみ肉溶接を付加する。		溶接位置	0	1	2	溶接方法	溶接姿勢	6.5.1	3.5	9	9	GC	F・H・V	6.5.2	3.5	7	9	GC	F・H・V	6.5.3	3.0	7	9	GC	F・H
溶接位置	0	1	2	溶接方法	溶接姿勢																						
6.5.1	3.5	9	9	GC	F・H・V																						
6.5.2	3.5	7	9	GC	F・H・V																						
6.5.3	3.0	7	9	GC	F・H																						
(裏はつり後溶接) 		$S = 1/4$ <table> <tr> <td>t</td><td>6.5</td><td>$t < 1.6$</td></tr> </table> 溶接姿勢 $F \cdot H \cdot V$ ● 両側に傾強すみ肉溶接を付加する。		t	6.5	$t < 1.6$																					
t	6.5	$t < 1.6$																									
(裏はつり後溶接) 		$S = 1/4$ <table> <tr> <td>t</td><td>12</td><td>16</td></tr> </table> 溶接姿勢 $F \cdot H \cdot V$ ● 両側に傾強すみ肉溶接を付加する。		t	12	16																					
t	12	16																									
(3) 部分溶け込み溶接		$S = \max(1/4, 5)$ <table> <tr> <td>t</td><td>$t < 1.6$</td></tr> </table> 溶接姿勢 $F \cdot H \cdot V$ ● 超音波探傷試験対象外とする。		t	$t < 1.6$																						
t	$t < 1.6$																										
		$S = \max(1/4, 5)$ <table> <tr> <td>t</td><td>12</td><td>16</td></tr> </table> 溶接姿勢 $F \cdot H \cdot V$ ● 超音波探傷試験対象外とする。		t	12	16																					
t	12	16																									

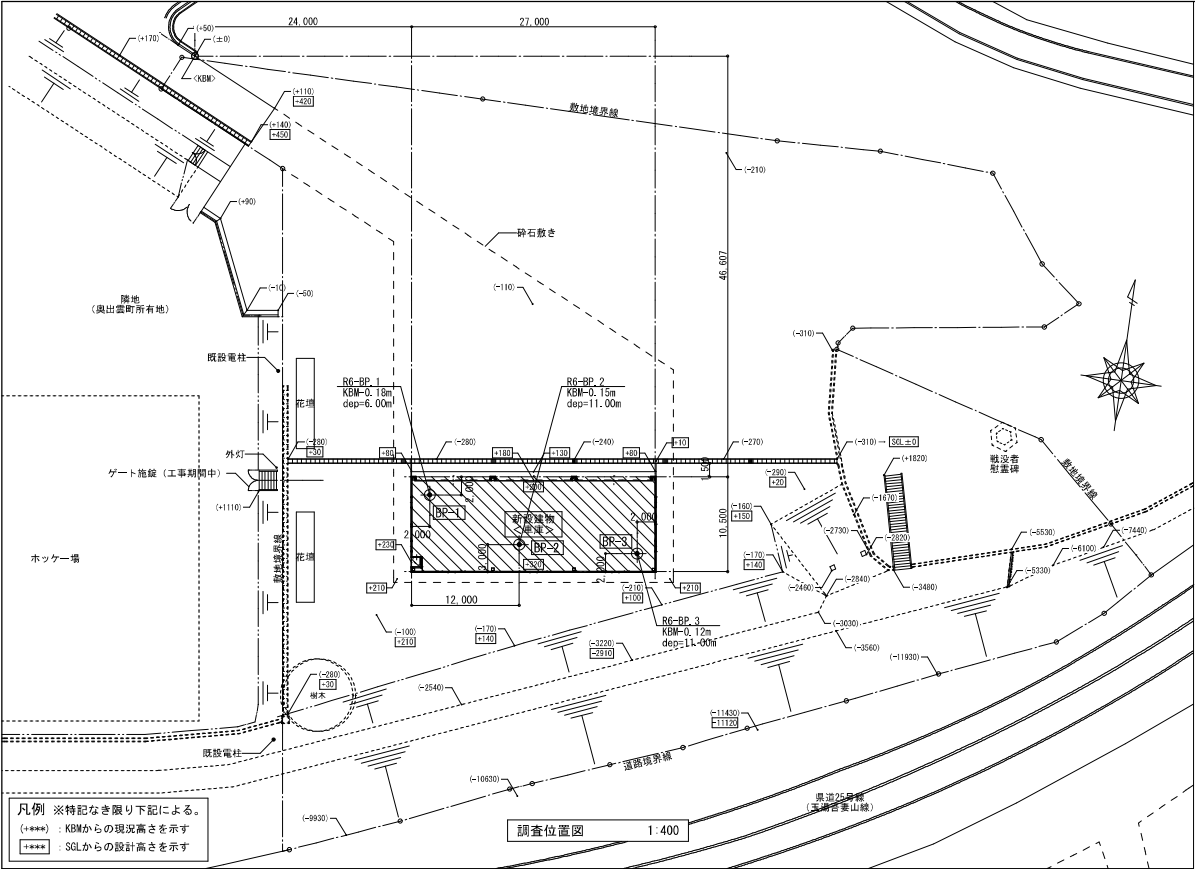
建築設備の構造安全性などに関する規定（建築基準法施行令第128条の2の3の規定）に関して、建築物に設ける建築設備においては、構造耐力上安全なものととして、以下の構造方法による。

- ☐ 建築設備（昇降機を除く）、建築設備の支持構造部及び架設金物は、腐食又は腐朽のおそれがないものとする。
- ☐ 屋上から突出する水櫃、煙突、冷却塔その他これらに属するものは、支持構造部又は建築物の構造耐力上主要な部分に、支持構造部は建築物の構造耐力上主要な部分に、架設すること。
- ☐ 煙突の屋上突出部の高さは、れんが造、石造、コンクリートブロック造又は無筋コンクリート造の場合は、鉄筋の支持を設けたものを除き、90cm以下とする。
- ☐ 煙突で壁内にある部分は鉄筋に対する2079-1のかぶり厚さを5cm以上とした鉄筋コンクリート造又は厚さが25cm以上の無筋2079-1造、れんが造、石造若しくはコンクリートブロック造とする。
- ☐ 建築物に設ける給水、排水その他の配管設備は、風圧、土圧及び水圧並びに地震その他の振動及び衝撃に対して安全上支障のない構造とする。
- ☐ 建築物に設ける給水、排水その他の配管設備は、建築物の部分貫通して配管する場合においては、当該貫通部分に配管スリーブを設ける等有効な管の損傷防止のための措置を講ずること。
- ☐ 建築物に設ける給水、排水その他の配管設備は、管の伸縮その他の変形により当該管に損傷が生ずるおそれがある場合において、伸縮継手又は可動継手を取り付ける等有効な損傷防止のための措置を講ずること。
- ☐ 建築物に設ける給水、排水その他の配管設備は、管を支持し、又は固定する場合においては、つり金物又は防振ゴムを付する等有効な地震その他の振動及び衝撃の緩和のための措置を講ずること。
- ☐ 法第20条第一号から第三号までの建築物に設ける屋上から突出する水櫃、煙突その他これに属するものについては、建設省告示第1389号により、風圧並びに地震その他の振動及び衝撃に対して構造耐力上安全なものとすること。

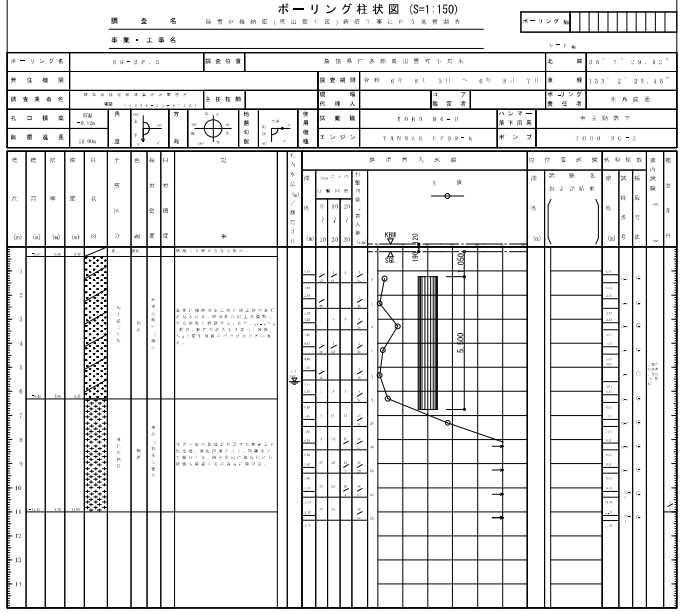
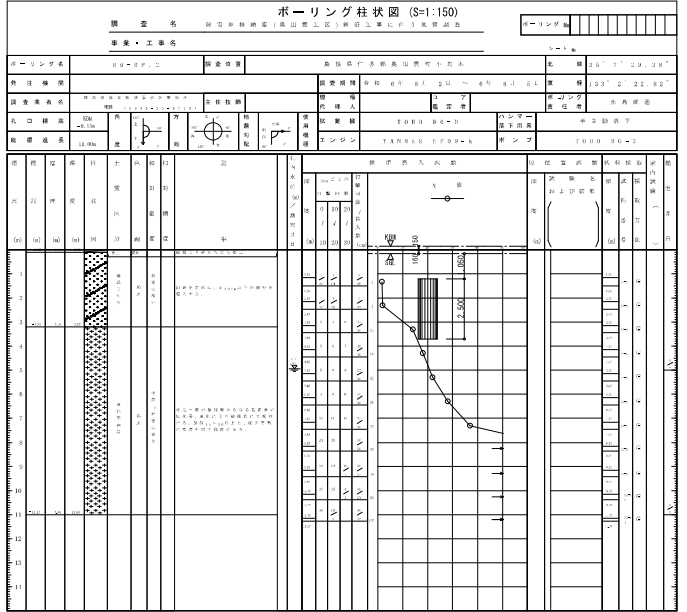
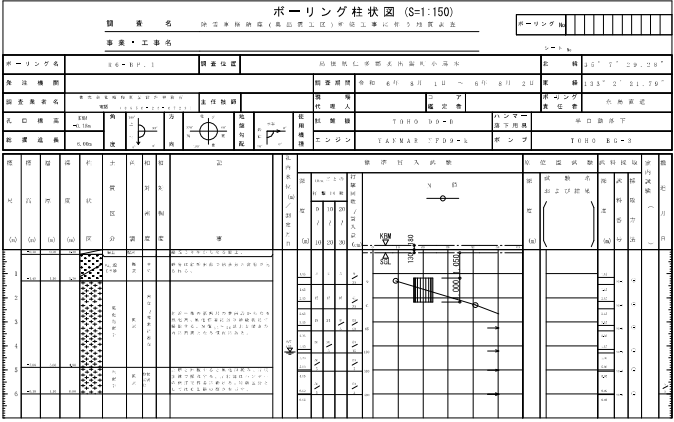
(98)

- ☐ 給湯設備⁽⁹⁸⁾は、風圧、土圧及び水圧並びに地震その他の振動及び衝撃に対して安全上支障のない構造とする。満水時の質量が15kgを超える給湯設備については、地震に対して安全上支障のない構造として、平成12年建設省告示第1389号第5に規定する構造方法によること。

(99)「給湯設備」：建築物に設ける電気給湯器その他の給湯設備で、屋上水櫃のうち給湯設備に該当するものを指したものとす。



凡例 ※特記なき限り下記による。
(+***): KBMからの現況高さを示す
+***: SGLからの設計高さを示す



深層混合処理工法特記仕様書

1. 工事概要

本地案は、ウルトラコラム工法（以下コラム）及び同等工法による地盤改良地業であり、本工法はスラリー状のセメント系固化材を地盤に注入しながら、攪拌装置を用いて、現地盤を機械的に混合攪拌し、固化材の化学反応により所用の強度を持つ改良体を築造するものである。

2. 一般事項

- (1) 本工事は、本特記仕様書によるほか、「2018年版 建築物のための改良地盤の設計及び品質管理指針—セメント系固化材を用いた深層・浅層混合処理工法—」（日本建築センター、以下指針という）による。
- (2) 本工事は施工技術審査証明を取得した工法とする。

3. 特記事項

- (1) コラムの径、掘削深度（改良長及び空掘り長）、コラム本数・配置、固化材液の配合、固化材添加量等については、土質や地盤状況により変更することがある。
- (2) コラムの径、掘削深度（改良長＋空掘り長）、本数配置などは、設計図による。
- (3) コラムの設計基準強度 $F_c = 1350 \text{ kN/m}^2$ とする。

4. 施工計画

- (1) 本工事の施工業者は、本工法の施工技術に精通した者とする。
- (2) 施工計画書
- 工事に先立ち、施工計画書を監督員に提出する。施工計画書は次の事項を明記する。
- ① 工事内容（コラム長、空掘り長、コラム数、コラム配置、設計基準強度）

② 工事期間・工事工程

③ 工事要領（使用固化材、配合量、吐油量、掘削翼の速度等）

④ 施工設備

⑤ 施工管理の方法

⑥ 品質管理方法

⑦ 施工記録の方法

⑧ 安全対策

⑨ 建築請負業者の工事責任者名

⑩ 本工事施工業者名及び責任者名

5. 施工

- (1) 施工機械が傾斜・転倒しないように作業地盤を養生する。
- (2) 固化材の充てん方法は、掘削時充てん方法とする。
- (3) 施工速度 改良部掘削速度 $V_d = 1.0 \text{ m/分}$ 以下 改良部引き上げ速度 $V_u = 1.0 \text{ m/分}$ 以下
- (4) 本工事により排出される発生残土は場内処理とする。
- (5) 施工に対して不都合が生じた場合は、ただちに監督員と協議し、その指示を受ける。

6. 施工機械

- (1) 改良機本体は自走式とし、攪拌装置の深度、速度と固化材液の吐出量を規定値にて管理し自動記録計機器を装備したものとする。
- (2) 攪拌ロッドは、曲がりや交換のないものとし、ウルトラコラム翼を装備したものとする。
- (3) ミキシングプラントは、所定吐出量を十分供給できるものとする。

7. 配合管理

- (1) 固化材液に使用する固化材は、セメント系とする。
- (2) 配合強度
- 本工法における配合管理は、合格確率を80%とする場合の割り増し係数表を下表を用いて設定する。
- | 抜き取りヶ所数N | | 1 | 2 | 3 | 4～6 | 7～8 | 9～ |
|-----------------|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 割り増し係数 α | 25% | 2.163 | 1.918 | 1.815 | 1.719 | 1.651 | 1.594 |
| | 30% | 2.597 | 2.240 | 2.095 | 1.961 | 1.869 | 1.792 |
| | 35% | 3.160 | 2.649 | 2.448 | 2.265 | 2.140 | 2.037 |

- $X_f = \alpha \cdot F_c$ (X_f : 配合強度、 F_c : 設計基準強度)
- (3) 室内配合試験
- 本施工において、使用する固化材添加量、固化材液の配合 (W/C) は、室内配合試験の結果に基づいて（現場／室内）強度比を考慮した上で設計基準強度を満足するように設定する。あるいは、正確に土質に対する既存データがある場合は、その結果を用いて添加量を決定する。

8. 施工管理

- (1) 施工過程における管理方法は次の通りとする。
- ① コラムの形状

② 支持地盤監視

③ 攪拌混合度

④ 固化材液・添加量

コラム径

鉛直性

コラム芯

掘削深度

回転トルク・掘削深度

掘削・引き上げ速度

羽根切り回数

材料の計量

吐油量・吐出深度

攪拌装置の形状を測定

施工機本体のリーダー内に設置された傾斜計で管理

事前にコラム芯にマークを付ける

深度計による計測

トルク計・速度計による計測

速度計による計測

掘削翼・攪拌翼の枚数等

固化材料・水の投入量による確認

流量計による計測

9. 品質管理

- (1) 検査対象群、調査ヶ所数、検査対象層
- ① 検査対象群
- 検査対象群は、概ね100本を1単位とする。検査対象層は柱状図より決めるが最小層厚を0.5mとする。
- ② 調査ヶ所数
- 本工事における調査ヶ所数は以下とする。
- 頭部：1ヶ所（モールドコア） 深部：1ヶ所×2深度（全長コア）
- ③ 検査対象層
- 検査対象層は、「曝湿じり砂、粘土湿じり砂」とし、設計対象層は「砂質土」とする。
- (2) コア採取率による検査
- | 全長に対する割合 | 砂質土に対する採取率 | 粘性土に対する採取率 |
|----------|------------|------------|
| 全長に対する割合 | 95% | 90% |
| コア1m毎の割合 | 90% | 85% |

- (3) 合格判定基準
- ① 検査手法はAを適用する。
- ② 検査対象層に対し抜取ヶ所をNとする。1ヶ所当り3個の供試体を採取し、その平均強度を対象層の強度とする。
- ③ 合格判定は、検査対象層Nヶ所（抜取ヶ所数）の一軸圧縮強さの平均 X_N と合格判定値 N_L の関係式である。
- 下式を満足すれば合格とする。
- $X_N \geq X_L = F_c + k_a \times \sigma_d$
- X_N : Nヶ所の一軸圧縮強さの平均値 (kN/m^2)
- X_L : 合格判定値
- F_c : 設計基準強度 (kN/m^2)
- k_a : 合格判定係数
- σ_d : 標準偏差 (kN/m^2) ($V_d \times q_{ud}$)
- q_{ud} : 想定した一軸圧縮強さ (kN/m^2)

抜き取りヶ所数N	1	2	3	4～6	7～8	9～
合格判定係数 k_a	1.9	1.7	1.6	1.5	1.4	1.3

10. 報告

- 工事完了後、次の項目について報告書をまとめ3部監督員に提出する。
- ① コラム伏図及び施工番号
- ② コラム施工日
- ③ コラム径及び長さ
- ④ 掘削深度
- ⑤ 掘削速度及び引き上げ速度
- ⑥ 固化材の配合と固化材の使用量
- ⑦ コアの強度管理試験
- ⑧ 全てのコラムについての流量、速度、深度を自動記録したデータシートの写し

		工事 内容	除雪車格納庫(奥出雲工区)新築工事			作成日	令和6年11月		A・S・E・P・M
			深層混合処理工法特記仕様書	編尺	—	代表	承認	担当	14



角形鋼管

F値295N/mm²以下

□-150×150 ~ □-300×300 用

(一財)日本建築センターによる一般評定「BCJ評定-ST0093-18」(令和4年11月17日付)

ベースパック柱脚工法標準図

岡部株式会社

TEL03 (3624) 5336

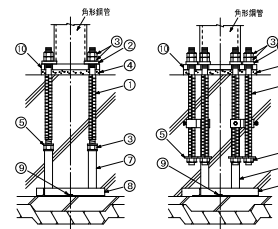
旭化成建材株式会社

TEL03 (3296) 3515

2023年7月作成

1. 工法概要

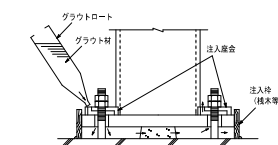
1.1 構成部材



- ① アンカーボルト
- ② 注入座金
- ③ Mナット
- ④ ベースパックグラウト(グラウト材)
- ⑤ 定着座金
- ⑥ ベースプレート
- ⑦ フレームポスト
- ⑧ フレームベース
- ⑨ スチコンアンカー(コンクリートアンカー)
- ⑩ ベースプレート

(注)上記①~⑥の構成部材はベースパック構成部品として供給される。
(注)上記⑦~⑩は現場状況により仕様が変わる場合がある。

1.2 柱脚の定着方法概要



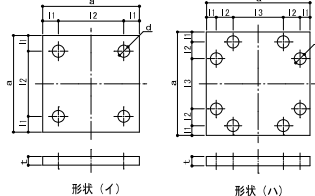
2. 柱

F値(N/mm ²)	鋼種	採用
235	BCP235 STKR400	
295	BCR295 TSC295	○

3. 構成部材・寸法

3.1 ベースプレート

●材質
SN490B (JIS G 3136)



3.3 Mナット

【建築基準法第37条第2号に基づく国土交通大臣認定材料】

呼び	A	B	単位 mm
M27	22	41	47
M30	24	46	53
M33	26	50	58
M36	29	55	64
M39	31	60	69

3.4 定着座金

呼び	単位 mm
M27	55 9 28
M30	55 9 31
M33	60 9 34 SS400
M36	65 12 37
M39	80 12 40

3.5 注入座金

【建築基準法第37条第2号に基づく国土交通大臣認定材料】

記号	寸法	単位 mm
PM27	M27 32 42 101 18 28	
PM30	M30 32 42 101 18 31	
PM33	M33 36 45 110 18 34	
PM36	M36 35 45 110 18 37	
PM39	M39 38 48 118 18 40	

3.2 アンカーボルト (Mアンカーボルト)

【建築基準法第37条第2号に基づく国土交通大臣認定材料】

呼び	単位 mm
M27	D29 650 45 128 490
M30	D32 696 45 133 490
M33	D35 690 735 45 95 140 490
M36	D38 770 60 130 490
M39	D41 770 810 60 98 135 490

3.6 フレームベース

呼び	単位 mm
M27	650 45 128 490
M30	696 45 133 490
M33	690 735 45 95 140 490
M36	770 60 130 490
M39	770 810 60 98 135 490

3.7 アンカーフレーム形状および据付け時諸寸法

●ベースパックの据付け高さ(寸法)はフレームベース下端からコンクリート柱型天端までを示す。据付けに最低必要高さ(最低寸法)は下表に記載の値とする。

呼び	単位 mm
M27	650 45 128 490
M30	696 45 133 490
M33	690 735 45 95 140 490
M36	770 60 130 490
M39	770 810 60 98 135 490

4. コンクリート柱型

4.1 形状・材質

●形状
形状は正方形とし、寸法は下表に記載の値とする。

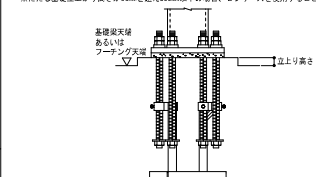
呼び	単位 mm
M27	D29 650 45 128 490
M30	D32 696 45 133 490
M33	D35 690 735 45 95 140 490
M36	D38 770 60 130 490
M39	D41 770 810 60 98 135 490

●コンクリート
普通コンクリートとし、設計基準強度は21N/mm²以上とする。

●鉄筋
SD295 (D13, D16)
SD345 (D19, D22)

4.3 基礎立上がり

●基礎立上がり高さは50mm以下とする。
※ただし基礎立上がり高さが50mmを超え300mm以下の場合、Lシリーズを使用することができる。



4.4 特記事項

- 採用
□ 下表標準柱型寸法からの変更あり(注記寸法最大・最小値一貫)による
- 下表標準配筋仕様からの変更あり
- 立上り筋に頂部フックが必要

5. 工場製作(溶接)

■組立
●ベースプレートの中心線(加線)に柱材軸心を合わせる。

■溶接方法(完全溶込み溶接)
●完全溶込み溶接とする。(JASS 6 鉄骨工事による)

溶接方法	溶接長さ	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度
溶接方法	溶接長さ	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度
溶接方法	溶接長さ	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度	溶接強度

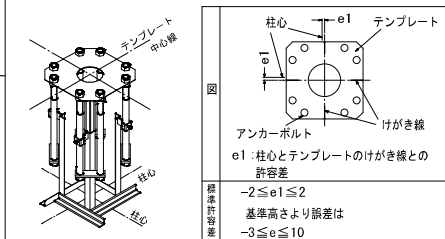
6. 工事場施工

6.1 基礎工事

●柱脚部のコンクリートの厚さは90mm以上とし、表面は平滑に仕上げる。

6.2 アンカーボルト据付け

- アンカーボルト(フレーム)の組立ては、4隅のアンカーボルト4本で組立てを行う。
- フレームベースはステコンアンカーにより水平に固定する。
- 位置決めは、テンプレートの中心線と地盤等の柱心を合致させることにより行い、標準許容差は下図による。



6.3 配筋およびコンクリート打設

- 配筋はアンカーボルト(フレーム)との取り合いを考慮する。
- コンクリート打設前にテンプレート位置精度を確認する。

6.4 建方

●レベリングはベースパックグラウト(グラウト材)を使用し、大きさは右図による。

6.5 アンカーボルトの本締め(弛み止め)

●本締めはグラウト材の充填前に行い、ダブルナットを標準とする。

6.6 ベースパックグラウト(グラウト材)の注入

- グラウト材のカクハンは、グラウト材1袋(6kg)に対して、計量カップで1.0~1.1ℓの水を加え、電動カクハン機で混練することにより行う。
- グラウト材の注入は、グラウトロートを注入座金にセットし、グラウト材の自重により他の注入座金からグラウト材が噴き出るまで行う。

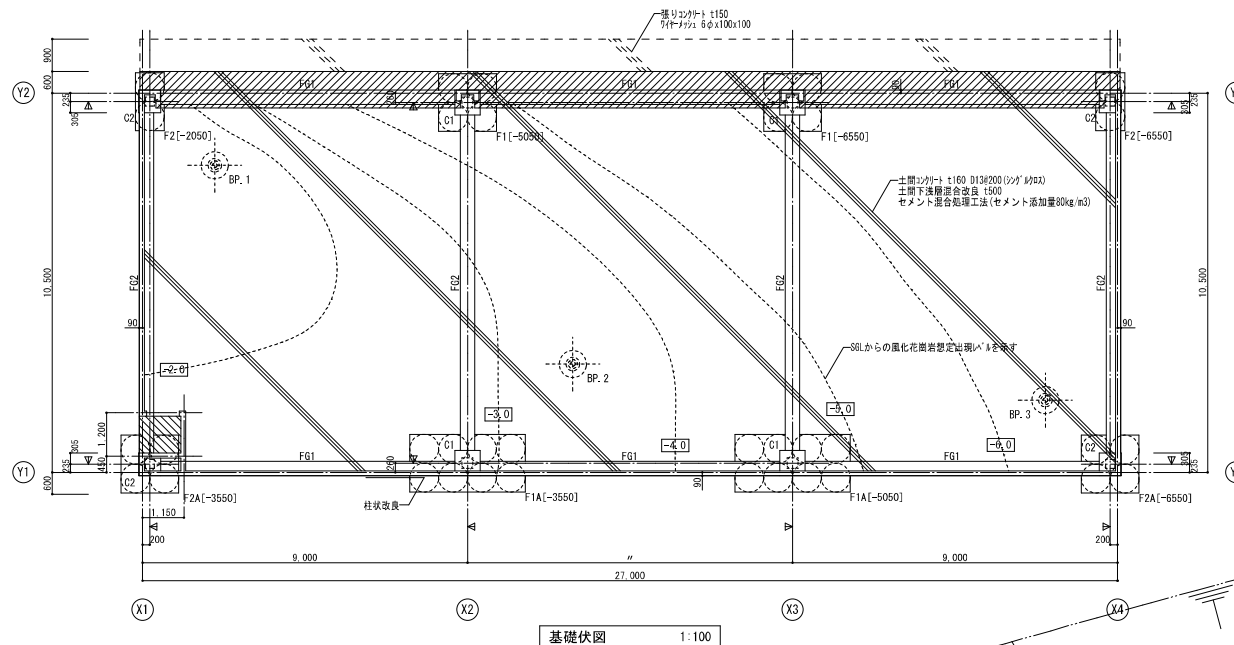
7. 本工法の施工及び施工管理

●本工法は、管理者又は施工者(元請)の管理のもとで実施するものとする。

●本工法のうち6.2 アンカーボルト据付け及び6.6 ベースパックグラウトの注入は、ベースパック・セレクトベース施工技術委員会によって認定された有資格者(ベースパック施工管理技術者・施工技能者)が施工を実施し、チェックシート等により施工管理を行うものとする。

●ベースプレート溶接部の施工管理は、鉄骨製作者に属する鉄骨製作管理技術者等による。

除雪車格納庫(奥出雲工区)新築工事	作成 令和6年11月	A 〇 E・P・M
ベースパック柱脚工法標準図	代表 〇	15



特記なき限り下記による

- | | |
|------------------|--|
| 1. 壁厚 | : W12 |
| 2. ∇ 印 | : 基礎面(柱芯)を示す |
| 3. 柱型天端 | : 1FL-300 |
| 4. 地中梁天端 | : 1FL-300 |
| 5. カット天端 | : <div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="width: 20px; height: 20px; border: 1px solid black; background: repeating-linear-gradient(45deg, transparent, transparent 2px, black 2px, black 4px); margin-right: 5px;"></div> <div> ...1FL±0~+120
 ...1FL+30~+50
 ...1FL-20~-70 </div> </div> |
| 6. 基礎下の設計地耐力(長期) | : 250kN/㎡ (F1, F2)、125kN/㎡ (F1A, F2A) |
| 7. [****] | : SQLからの取次コラム据附長を示す |

柱状数量表				
改良径	800 φ			
空容長	SGL-1.05m			
掘削長	SGL-2.05m	SGL-3.55m	SGL-5.05m	SGL-6.55m
改良長	1.00m	2.50m	4.00m	5.50m
本 数	2本	12本	12本	10本
総本数	36本			
備 考	改良コラム先端が、風化花崗岩まで破棄に到達していることを確認の上施工すること			

地中梁リスト 1:50

記号	FG1, FG2	
B × D	400	× 800
位置	端部	中央

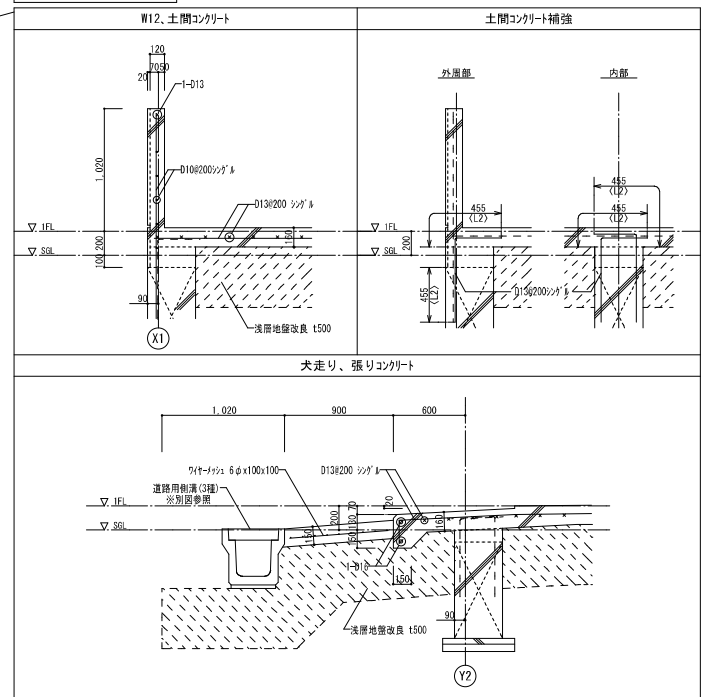
断面

上筋	4 - D22	4 - D22
下筋	4 - D22	6 - D22
STR	D13 - #200	
腹筋	2 - D10	
備考	幅筋 D10 - #1000	

共通事項 <使用材料>

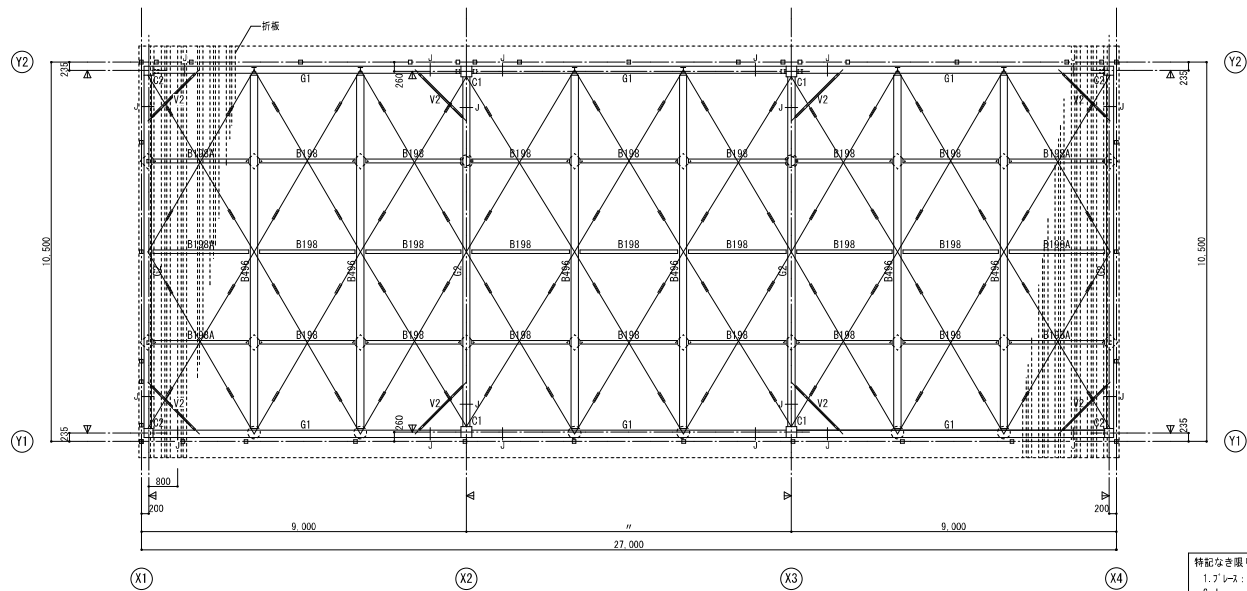
コンクリート	$f_c=21\text{N/mm}^2$, スラブ 18 (腰壁) $f_c=21\text{N/mm}^2$, スラブ 15 (上記以外の躯体) $f_c=18\text{N/mm}^2$, スラブ 15 (捨てコン、張りコン)
鉄筋	SD345 (D19以上) SD295 (D16以下)

各部配筋図	1:30
-------	------



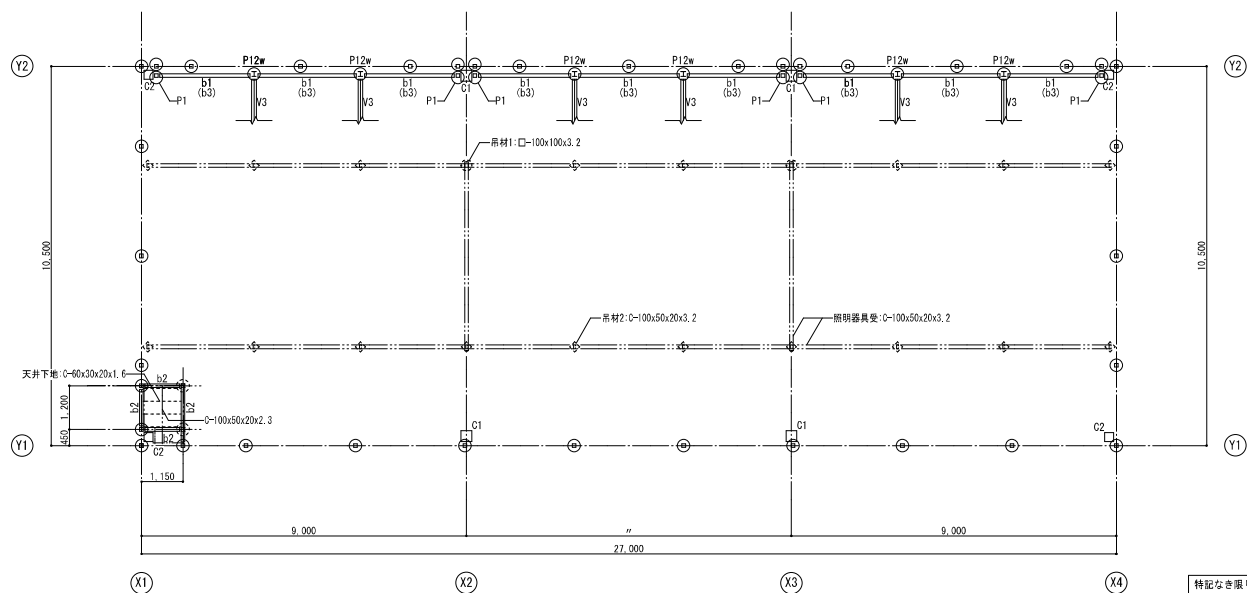
基礎リスト	1:50
-------	------

記号	F1	F1A	F2	F2A
断面				



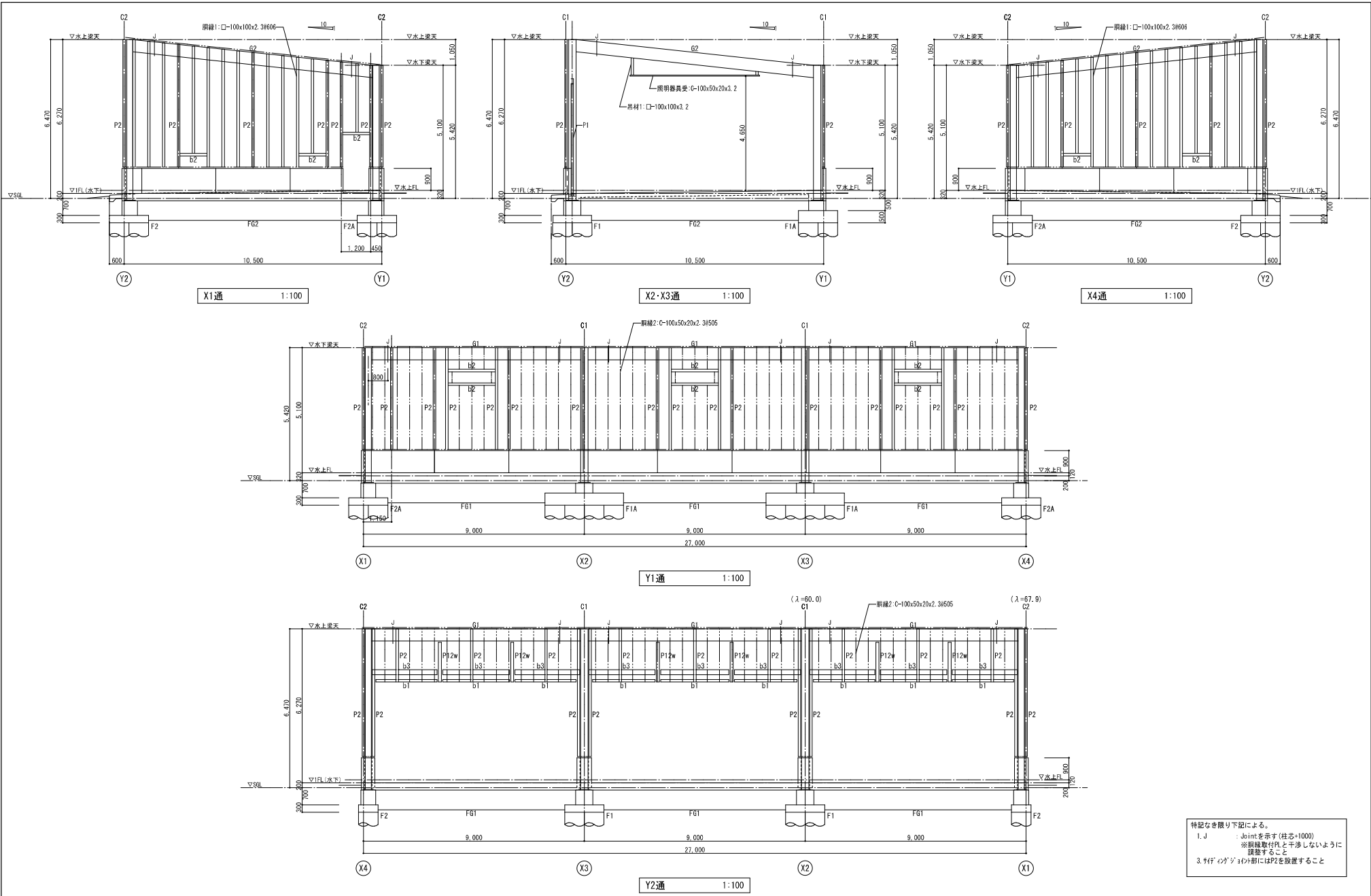
小屋伏図 1:100

特記なき限り下記による。
1. 7/16ス : Y1
2. J : Jointを示す (柱芯+1000)
3. ▽印 : 柱芯を示す



二次部材伏図 1:100

特記なき限り下記による。
1. 照柱 : P2
2. () : 二股上部部材を示す



特記なき限り下記による。
1. J Jointを示す(柱芯+1000)
※取組取付と平準しないように
調整すること
3. サイディング部にはP2を設置すること

除雪車格納庫（奥出雲工区）新築工事		作成日	令和6年11月		A⑤E・P・M	
軸組図	縮尺	1:100	代表	模図	担当	18

鉄骨部材リスト (保有力換合)

(1) 主材はSS400 (2) SPL, GPLはSS400 (3) フランジとウェブの鋼材は同種 (4) 鋼材は、HTB-S10T (JIS B 1186) 及び、F10T (JIS B 1186) (5) 特記なき鋼材は、M20 (M12以下は中鋼材)

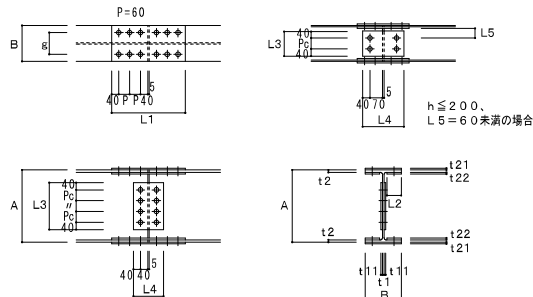
主柱記号	大梁記号	小梁記号	その他 二次部材 記号	主 材 A x B x t1 x t2	剛接合仕口 及 継手								小梁・間柱・仕口				間柱・柱脚		備 考
					ボルト 径	フランジ（上下左右の合計本数）			ウェブ（左右の合計本数）			GPL	ボルト 列	ボルト 数本	仕 口 数タイプ	Base. PL t x A x B	Anchor. Bolt		
						ボルト 総本数	外側添板 数	内側添板 数	ボルト 総本数	Pc	添 板 数								
C1				□-300x300x12													へーｽﾊﾟﾝ ｻｯ (30-12V)	BCR295	
C2				□-250x250x9													へーｽﾊﾟﾝ ｻｯ (25-09V)	BCR295	
	G1, G2			H-500x200x10x16	M20	24	1	12x200x410	12x 80x410	10	1	60	9x320x170						
		B496		H-496x199x9x14										12	1	6	B		
		B198		H-198x 99x4. 5x7										9	2	4	A, B		
		B198A		H-198x 99x4. 5x7										9	3	6	A, B		
			P12w	H-125x125x6. 5x9										9	2	2- M16	A		
			P1, b1	□-100x100x3. 2										6	2	2- M12	A	9x120x260 2-M16	
			P2, b2	□-100x100x2. 3										6	2	2- M12	A	STKR400	
			b3	[-200x80x7. 5x11										9	1	2	B		
			V1	RB-M20										9	1	1- M20			
			V2	[-100x50x5x7. 5										9	3	3	A		
			V3	2L-65x65x6										6	2	2- M16	A		
			鋼縁1	□-100x100x2. 3										6	2	2- M12	A	STKR400 #606	
			鋼縁2	C-100x50x20x2. 3										6	2	2- M12	A	SSC400 #505	
			折板受 増設鋼縁	C-100x50x20x3. 2														SSC400	
			吊材1	□-100x100x3. 2										6	2	1- M12	A	STKR400	
			吊材2	C-100x50x20x3. 2										6	2	1- M12	A	SSC400	
			照明器具受	C-100x50x20x3. 2										6	2	1- M12	A	SSC400	

剛接合継手

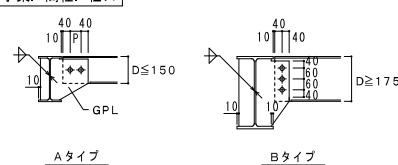
フィラープレート

F.P.L W.P.L

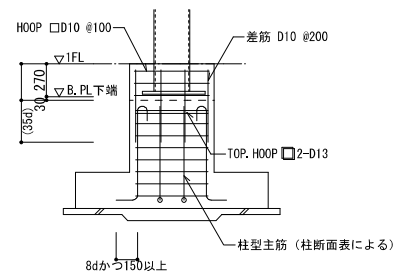
面で段差が1mm以上ある場合は、フィラープレートを入れる



小梁・間柱・仕口



柱脚補強配筋要領図



柱脚リスト

1:30

柱記号 (柱脚記号)	C1 (30-12V)	C2 (25-09V)
柱 寸 法	□-300×300×12	□-250×250×9
フック・ボルト	8-M30	4-M36
ベースプレート	520×520×32	420×420×32
柱形断面	700×700	610×630
柱 主 筋	12-D22	12-D22
帯 筋	D13@100	D13@100

図 案

備 考

柱脚拡大方向は基礎伏図による

除雪車格納庫 (奥出雲工区) 新築工事

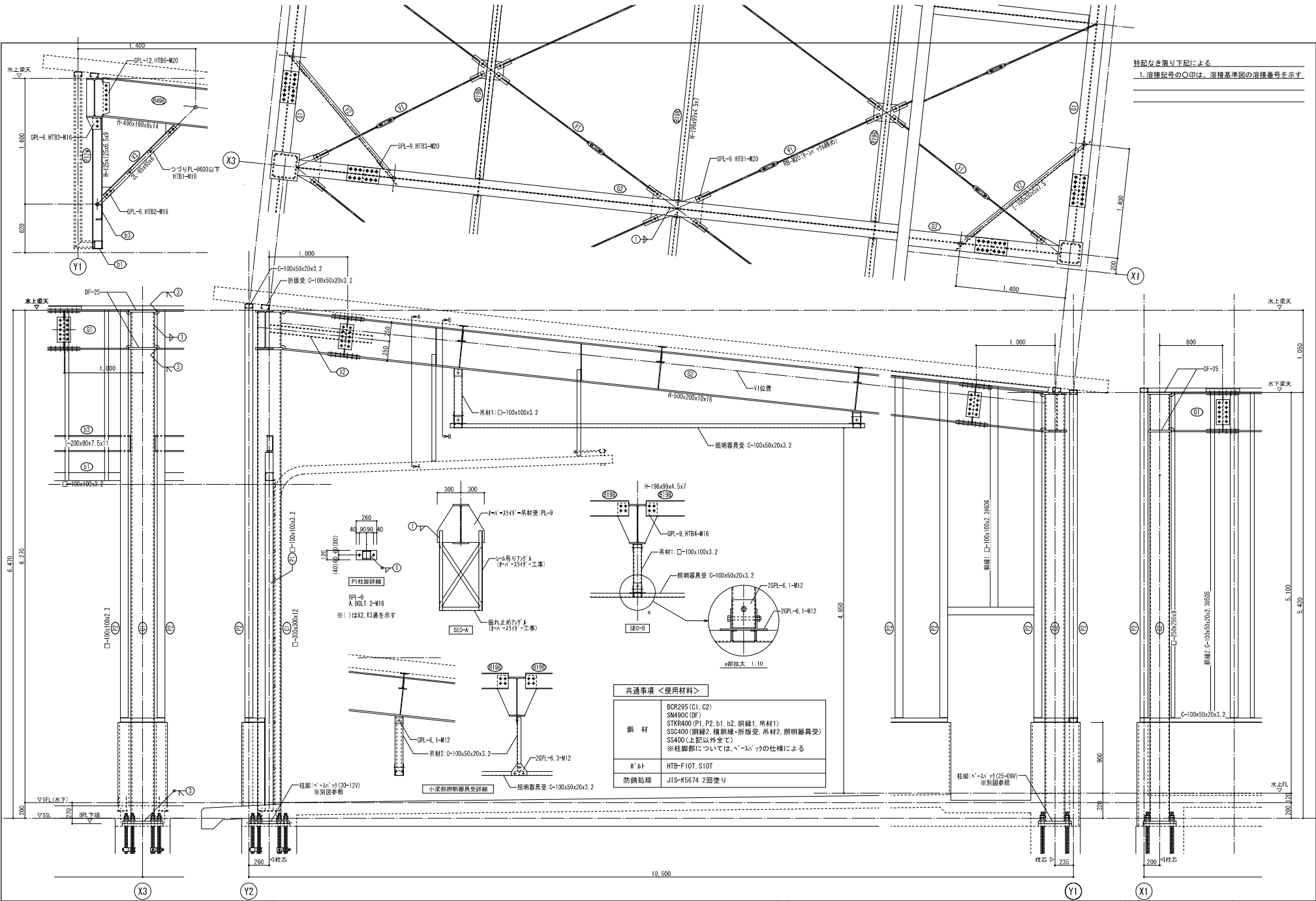
鉄骨部材リスト、柱脚リスト

令和6年11月

A・E・P・M

1:30

19



除雪車格納庫（奥出雲工区）新築工事		作成日	令和6年11月		A⑤E・P・M	
鉄骨詳細図	縮尺	1:30	代表	換図	20	